

教員研修留学生プログラムの見直しと改善の取り組み

—現職教員研修の観点から—

* 高橋 亜紀子・** 本 関 愛 実

Revision and Efforts to Improve The Program for Teacher Training Student
From The Viewpoint of In-service Teacher Training

TAKAHASHI Akiko and HONZU Manami

要 旨

宮城教育大学では、教員研修留学生プログラムを改善するため、教員研修留学生及び教員に対する聞き取り調査を行い、プログラムの課題を分析し、現職教員研修の観点からプログラムの見直しを行った。2015年度から2019年度にかけて、教員に求められる資質能力の自己評価やプログラム前・中・後のインタビューなどの取り組みを行った。その結果、教員研修留学生が自己の課題と学びに向き合うことにつながり、学び続ける教師としての研修につなげることができた。

Key words : 教員研修留学生 (Teacher Training Student)

教員研修留学生プログラム (Program for Teacher Training Student)

現職教員研修 (In-service Teacher Training)

教員に求められる資質能力 (Qualities and Capabilities Required of Teachers)

学び続ける教師 (Keeping Learning as a Teacher)

1. はじめに

宮城教育大学では、文部科学省の「大使館推薦による国費外国人留学生(教員研修留学生)」事業をニーズに応じた国際的な教育交流・支援活動として全学的組織体制により継続的に実施してきた。第三期中期目標・計画においても、「国際協力機関の事業に積極的に協力を行い、国際教育交流・支援活動に貢献する」(グローバル化に関する目標, 21) が掲げられている。質の高い、国際交流と現職教育を行っていくことは、「教職のナショナル・スタンダードの形成・発展に資する」(前文) という大学の目指すべき姿を構成する一要素でもある。

本学の教員研修留学生のプログラムは、長年、内容

を大きく変えることなく、実施されてきた。しかしながら、ここ数年は、本プログラムの意義に対する疑問が呈され、教員の多忙化によって提供する講義が少しずつ減ってきている。また、プログラムの内容が教員研修留学生のニーズに合ったものなのかについても、これまで検証が十分にされてこなかった。そのため、現状のまま継続していくことは難しく、見直しが必要になってきている。

このような見直しの視点は、カリキュラム論ならびに組織論としても重要である。2016年に改訂された新学習指導要領の作成過程においては、コンテンツ・ベースを超え、コンピテンシー・ベースによるカリキュラムが学校づくりにおいて有効であるという見方が示され、種々の領域における実践が展開されてきた(高木

* 教員キャリア研究機構

** 教職大学院

ほか2017、本図2018)。本研究は、それらを現職研修においても実践し、国際的な発信へと発展させていく第一段階として位置づけることもできる。

本稿では、本学のプログラムの課題を分析して見直し、2015年度から2019年度までに行ってきた改善のための取り組みについて述べる。

2. 教員研修留学生プログラム

「教員研修留学生プログラム」は、日本政府（文部科学省）が実施する国費外国人留学生制度の1つで、1980年に創設された。対象は海外の初等、中等教育機関の現職教員及び教員養成大学の現職教員で、教員歴が通算5年以上で、35歳以下のものとされている。

文部科学省（2018）によると、このプログラムの対象国は開発途上国等90か国で、2018年度は80名を受け入れている。各国の日本大使館では、書類審査及び日本語または英語による筆記試験、面接試験が第一次選考として行われる。この結果が文部科学省に推薦され、文部科学省による第二次選考を経て、日本の教員養成系大学または教育学部で研修を実施することになっている。

教員研修留学生は日本語予備教育を6か月受けた後に、受け入れ大学で1年間の教育指導を受ける。大学院レベルという位置づけではあるが、学位の取得を目的とするプログラムではない。また、研修の修了とともに帰国し、自国の初等、中等教育機関の教員又は教員養成学校の教員として復職しなければならないとされている。

本学では、このプログラムが創設されて間もないころから教員研修留学生を受け入れてきた。ここ数年は、毎年1～7名を受け入れている。以下、教員研修留学生を「教研究生」と呼ぶ。

3. 現状のプログラム

本学では、(1) 文部科学省からの受け入れの照会、(2) 国際交流委員会留学生部会が教研究生の研修テーマを考慮して、該当講座に受け入れを依頼、(3) 講座から推薦された教員に指導教員を依頼、(4) 文部科学省に受け入れの可否を報告、(5) 学務委員会による受け入れの決定、という流れで受け入れを行っている。

プログラムは、国際交流委員会留学生部会が作成している。1年半の留学期間を3つに分け、Ⅰ期は日本語の予備教育（東北大学にて実施）、Ⅱ期は日本語、特別講義（日本の教育、日本の社会、日本の自然、日本の文化）、専門教育、Ⅲ期は日本語と専門教育である。なお、特別講義は、学校教育、社会科教育、教員キャリア機構に出講を依頼している。表1にプログラムを示す。

表1 プログラム

時 期	日 本 語	特別講義	専門教育
Ⅰ期 10～3月	予備教育 (東北大学)		
Ⅱ期 4～9月	会話・文法・漢字 (週3コマ)	日本の教育 (6コマ) 日本の社会 (3コマ) 日本の自然 (3コマ) 日本の文化 (3コマ)	指導教員 による指導 (週1コマ) 関連講義
Ⅲ期 10～3月	会話・文法・漢字 (週3コマ)		指導教員 による指導 (週1コマ) 関連講義

表1に示したものの以外に、教研究生の国の学校や教育制度について、日本人学生向けの講義や図書館のイベントなどで発表する、小学校や中学校の児童・生徒と交流する事業に参加する、などの機会もある。また、本学で学ぶ他の留学生とともに、日本文化の体験や実地研修などに参加することができる。

4. プログラムの課題

まず、課題を把握するため、2015年度から2016年度にかけて、本学の教員及び教研究生に対してアンケート調査を実施した。

4. 1. 本学教員へのアンケート調査

2015年度に本学のすべての教員に対して、本プログラムについてのアンケート調査を行った。対象は約100名の教員で、回答は29名から得た。

質問項目は(1) 本プログラムへの協力・活用に興味があるか、(2) 興味がある場合、どのような協力が可能か、(3) 興味がない場合、その理由は何か、(4) その他の意見や感想である。

調査の結果、(1) 本プログラムへの協力に興味があると回答したのは7名、場合によっては協力・活用したいが18名、協力・活用は難しいが4名であった。

(2) 興味がある場合、どのような協力が可能については、教研究生向けの講義の提供が10名、自分の担当する講義やゼミでの活用が8名であった。

具体的に提案された内容を以下に示す。

- 日本の自然
- 日本社会の抱える問題（過労死、ブラック企業等）
- 美術
- 技術やコンピュータ、情報モラルに関する考え方や国の状況の意見交換、ICT教育など
- ものづくり教育
- 他国の教育制度の理解
- 英語の授業、ALT とのコラボ授業の実践研究
- 英語によるコミュニケーションの練習
- 理科教育、南半球の天文教育など
- 家庭科教育、世界の食生活
- 日本の児童福祉、児童相談所の見学
- 特別支援教育の情報交換、国際協力への道筋
- 各国の国語教育の現状
- 子どもの体格や成長に関する話題提供・情報交換
- 災害予測の方法
- 言語の対照研究
- 大学院生と教員研修生との共修
- 共同研究

(3) 興味がない場合、その理由として、教研究生プログラム自体の情報が少ない(9名)、言語面での不安(8名)、担当授業内容とのミスマッチ(7名)、その他(7名)が挙げられた。

(4) その他の意見や感想として、以下のようなものが挙げられた。

- 通常の授業見学はいつでも可能である。
- 現在のシステムでは教研究生と密接にかかわるのは指導教員に限定されており、残念である。
- 毎年どのような教研究生が来ているのか情報提供をしてほしい。
- 学外の施設見学での無断キャンセルを防ぐために事前のルール共有や手続き方法の明確化が必要。
- 講座にお任せはやめてほしい。
- 教員研修を制度化する必要がある。現状ではシステム的に中途半端である。

- 日本の教育現場における研究授業の手法を身に付けてもらうようなプログラムの充実が必要だ。
- 受講者の資質能力伸長に合わせた個別のプログラムの作成ができるとよい。
- 教研究生の専門が異なるので難しいと思うが、コアとなるカリキュラムの内容は固定すべき。
- 指導に関わる教員間での定期的な情報交換の場がほしい。
- 教研究生には日本語または英語のいずれか一方の言語能力をクリアしてほしい。
- 現在担当しているが、教研究生の授業以外のスケジュールも知らせてほしい。
- 一般の日本人学生にとってもメリットのあるものであってほしい。
- 教研究生自身がこのプログラムに満足しているのか。
- アンケートを踏まえて説明会を開催してほしい。

以上、本学教員への調査から、多くの教員が教研究生のプログラムに興味を持っており、協力や活用に好意的であることが分かった。

課題としては、教研究生を人的リソースとして活用するための情報提供が必要であること、担当者間の定期的な情報交換の場が必要であること、コアとなるカリキュラムの策定や個別プログラムの作成などにより現行のプログラムを改善していくことが必要であることが明らかになった。

4. 2. 教研究生へのアンケート調査

2015年度は5名(L1～L5)、2016年度は3名(L6～L8)を受け入れた。国籍は、インドネシア(2名)、ウズベキスタン(2名)、マダガスカル、バングラデシュ、東ティモール、フィリピンである。2015年度及び2016年度に実施したプログラムは表1と同様である。プログラムの修了時にアンケート調査を実施した。調査項目は(1)～(6)の6つである。

(1) はプログラムの内容についての評価である。プログラム全体、日本語、特別講義(日本の文化、自然、社会、教育)、専門教育、学校訪問、自国の紹介・発表、文化体験の全11項目それぞれについて、「とても満足〈4〉」～「とても不満〈1〉」の4段階で評価してもらった。(2) はプログラムに対する意見や感想、(3) はプログラムを通して学んだこと、(4) は日本で学んだことを帰国後どのように役立てたいか、(5) はプログラ

表2 プログラム内容の評価

教 研 生	L 1	L 2	L 3	L 4	L 5	L 6	L 7	L 8	平均値
プログラム全体	4	4	4	3	4	4	4	4	3.88
日 本 語	4	4	4	4	4	4	4	4	4.00
日 本 の 文 化	4	4	4	4	4	4	4	4	4.00
日 本 の 自 然	4	4	4	4	4	4	4	4	4.00
日 本 の 社 会	4	4	3	4	4	4	4	4	3.88
日 本 の 教 育	3	4	3	3	4	4	4	4	3.63
専 門 の 学 習	4	4	4	4	4	4	4	3	3.88
指 導 教 員 の 指 導	4	4	4	4	4	4	4	4	4.00
学 校 訪 問	3	4	4	4	4	4	4	4	3.88
自 国 の 発 表	3	4	3	3	4	4	4	4	3.63
文 化 体 験	3	4	3	4	3	4	4	4	3.63
平 均 値	3.64	4.00	3.64	3.73	3.91	4.00	4.00	3.91	3.85

ム改善へのアドバイス、(6)はその他の感想や意見である。ここでは、(1)～(5)の結果を示す。

まず、(1)のプログラム内容についての評価を表2に示す。

表2より、プログラム全体の平均値は3.85、それ以外の項目も3.63～4.00となっており、教研生は本プログラムの内容に満足していると言える。

次に、(2)のプログラムに対する意見や感想を表3に示す。回答は英語で書かれているものを日本語に翻訳したものを示す。

表3 プログラムに対する意見や感想

教 研 生	回 答
L 1	このプログラムは大変すばらしかった。このプログラムを通し、私は多くの経験をした。私の指導教員はとても親切で多くのことが学べた。異なる専門分野の授業もいくつか受けられたのは素晴らしい経験だった。私は日本語の先生に大変感謝している。日本語の授業は専門が異なる私たち教研生が毎週会える唯一の機会だった。多くのことが学べた。
L 2	私たちは効果的な英語教育法を学んだだけでなく、日本での生活を容易にする日本文化についても学ぶことができ、これまでにないほど素晴らしいプログラムだった。日本の先生方のサポートにより、日本の人々との交流や彼らの仲間に加わることができたことを大変うれしく思う。

L 3	宮教大でのすべてのプログラムについて大変満足している。特に、県内の学校訪問は有意義だった。日本大使館から私の派遣先が宮教大であり、教育について学べることを伝えられたとき大変うれしく、期待していた。ほぼ1年が経過し、このプログラムに対し満足感でいっぱいだ。
L 4	私は多くのことを学んだ。日本(教育、文化、言語、環境など)について学ぶ機会があった。また、このプログラムは他国における教育について目と心を開ける機会となった。世界各国からの教員がここに集まり、それぞれの知識を向上させ、お互いに新たな経験を得る機会となった。
L 5	宮教大でのプログラムは日本の人々、社会、生活について、私たちの知見を広げるのに大変有益だった。
L 6	このプログラムはとてもよい。もし私が提案してもよいとすれば、学校訪問プログラムがもっと頻繁にあればよい。日本の学校を訪問するという経験はとてもよく、自国での教育プログラムに反映させる参考材料となる。
L 7	日本語教員は経験豊富で、多くのことを学んだ。英語教育の専門家からも指導を得た。日本の文化や言語を学んだ。
L 8	専門性だけでなく、よい教育者になるための人格形成にも役立った。数学教育のカリキュラムも帰国後に同僚と共有したい。日本文化や伝統やそれを守る日本人も理解できた。

表3から、教研生は本プログラムを高く評価していると言える。教育方法のほか、指導教員からの指導、日本語学習、日本文化、日本や他国の教育との比較などが評価されている。

(3) のプログラムを通して学んだことの結果を表4に示す。

表4 このプログラムを通して学んだこと

教研生	回答
L1	私は多くのことを学んだ。例えば、日本語、文化、社会、自然、そして最も大切なのは日本の教育である。私は英語教育について日本とバングラデシュの比較研究をすることができた。
L2	日本の文化、自然、社会、教育、日本語、英語教育における優れた方法。
L3	日本の教育システムを知り、母国の教育システムと比較できた。
L4	日本の英語教育、文化、自然。季節の変化に適応する方法、新しいものだけでなく、古いものを大事にすること、社会でのふるまい方など。
L5	論文の書き方、科学的な研究発表の仕方、授業に動画を活用する方法、社会の講義で学んだことを友人に伝えたい。
L6	私は多くのことを学んだ。例えば、日本の学校の人格形成のための教育方法、社会でのよいふるまい方、研究の進め方、日本語など。多くの日本人や外国人との交流を通じて人との付き合い方を学んだ。
L7	日本語学習、日本人や多くの外国人の友達が出来たこと、ウズベキスタンの英語教育の問題点とその解決への視点を得たこと。
L8	教師としてだけでなく、個人としての成長もできる機会だった。数学教育のカリキュラム、日本文化と伝統、それを重視する日本人。

表4の回答から、日本の教育と自国の教育の比較から見えてきたことや、日本の社会・文化への理解が深まったことが分かる。

(4) の日本で学んだことを帰国後どのように役立たいかの結果を表5に示す。

表5 帰国後に役立たいこと

教研生	回答
L1	日本では様々な状況で、多くの経験をし、多くのことを学んだ。日本人が時間に厳しいことがわかり、私の人生にも取り入れたい。
L2	マダガスカルで学校を開きたいので、生徒の英語が流暢になるように初めから英語で教える方法を取り入れたい。将来は日本語も教えたいと思っている。
L3	私の専門性を高めるのに役立った。ここで得た知識、教え方と学習のプロセスについて、自分の職場でも生かしたい。
L4	教育では、人格形成のための教育、教師と生徒の活動、ルールなどを学校で取り入れていきたい。文化では、しつけ、時間厳守、ゴミの捨て方、公共の場におけるマナーなど、よいことを共有して実施すること。世界規模で考え、地域で活動すること。
L5	私の授業はこれまで厳しすぎたので、生徒がもっとリラックスして勉強できる環境を作りたい。例えば、授業で生徒が発言しやすくなるように、動画やカードなどを使った会話も取り入れたい。
L6	人格形成のための教育の方法を学校に取り入れ、教師の集まりなどでも広げていきたい。自分の教え方について研究する方法についても広げていきたい。日本の良い習慣も取り入れたい。
L7	英語教育では、教師と生徒の動機づけを高めること、作文やエッセー、メッセージ、国際試験のためのアカデミックなエッセーの書き方など。日本の学校の子どもたちのよい振る舞いを録画したビデオを生徒たちに見せたい。
L8	学んだことすべてを共有したい。フィリピンの数学教育をよくしていきたい。日本での経験を伝えたい。研究も継続していきたい。他の教員にもこのプログラムに応募するように働きかけたい。

表5からは、専門教科の指導法のほか、日本の学校見学を通して学んだと思われる、人格形成のための教育やルール、マナー、学び続ける姿勢などが挙げられている。

最後に、(5) のプログラム改善へのアドバイスを表6に示す。

表6 プログラム改善へのアドバイス

教研究生	意見や感想
L1	学位の取得ができないこと。授業に緊張感がないこと。多くの場合、参加するだけだったので、体系的なプログラムにしたほうがいいのではないか。
L2	より多くの学校訪問の機会や実際に学校で指導する機会があるとよい。
L3	日本の教育についての授業の時間数を増やしてほしい。
L4	スケジュールと活動内容を明確にしてほしい。
L5	社会の授業を受講しなかった。企業見学も行きたかった。
L6	学校訪問がもっと頻繁にあれば、日本の教育とそのよさが理解しやすくなるのではないか。インドネシアで教える教員のためのテレビ会議システムなどがあれば、日本とインドネシアの文化交流もできる。
L7	私は小学校と中学校の授業を少しだけ見学したが、もっと多くの学校の授業を見たかった。英語教育の学会にも参加してみたかった。
L8	私はここでの経験にとっても満足している。1つ提案するなら、数学の授業を1年間継続して観察しながらレポートを書くことである。そうすれば、理論だけでなく、どのような指導がよいのかを具体的に考えることができる。

表6より、教研究生の多くは、日本の教育についてより多くのことを学びたい、学校訪問や授業見学をできるだけ増やしてほしいと望んでいることが分かる。このほか、スケジュールと活動を明確にしてほしいという意見も見られた。なお、学位が取得できないという指摘があるが、この制度は学位取得が目的ではないため、対応は難しい。

以上、2015年度及び2016年度のアンケート調査の結果から、本プログラムへの満足度は高いものの、日本の教育について学ぶ時間と学校訪問（特に、授業見学）をより多く望んでいるということが明らかになった。

4. 3. 現在のプログラムの課題

本学の教員及び教研究生へのアンケート調査の結果から課題として抽出されたものは、大きく以下の5つ

に整理される。

- (1) プログラム内容に改善が必要である
- (2) 教研究生を人的リソースとして活用するための情報提供が不十分である
- (3) 担当者間の定期的な情報交換の場がない
- (4) 教育に関連する講義数が不十分である
- (5) 学校訪問や授業見学の機会が不十分である

5. プログラムの検討

課題(1)～(5)のうち、特に大きな課題と思われる(1)のプログラム内容についての検討に取り組むことにした。

まず、教研究生を受け入れている全49の大学が作成しているコースガイドをもとに、参考となるプログラムがないかどうか検討した。コースガイドが公開されている48大学のうち、専門教育は指導教員による個別指導としているところがほとんどであった。また、特別講義等があるのは9大学のみであった。つまり、プログラムを組織的に運営している大学はほとんどないことが分かった。

次に、教研究生に関する先行研究を概観した。その結果、日本語教育に関連する研究（難波ほか2001、中山・難波2003、阿部・植木2015）、留学の効果に関する研究（永井2003）、日本語能力に関する研究（野呂ほか1997）、学校訪問や交流に関する研究（稲葉2015、和泉元2019）、教科教育に関する研究（橋本ほか1995）などで、プログラム改編に関するものは菅長（2012）と坂本（2014）のみであった。しかし、この2つの研究は「日本語の教員」である教研究生受け入れのプログラムに関するもので、教科教育を専門とする教員を受け入れている本学のケースにそのまま当てはめることは難しい。

本学は教師を理論と実践の往還の中で「生涯学び続ける存在」と捉え、「生涯学び続ける」という精神を創設期からの伝統として受け継ぎ、推進してきた。また、本学の教職大学院では、大学院生の研究を複数の教員でサポートする「教員ユニット制」を採用し、個々の研究や学校現場での実践を支援している。

こうした本学の教育の特色を生かし、教研究生が教員経験5年以上の現職教員であることを踏まえ、「現職教員の研修」という観点から見直しを行うことにした。

教研究生が「生涯学び続ける教師」となることを目指し、教職大学院の「教員のユニット制」を応用することにした。

「教員研修」については、宮城県教育委員会が作成した「みやぎの教員に求められる資質能力」を参考にすることにした。宮城県教育委員会では、平成20年度に「宮城県教員研修マスタープラン～学び続ける教員のために～」を策定している。これは子どもたちの健やかな成長のために、より一層自らの資質能力の向上を図ろうとする教員の意欲と努力を支援するためのものである。このマスタープランには宮城県の教員に求められる7つの資質能力ごとに4つの教職経験段階において必要とされる具体的な要素が示されている。宮城県では、「教員研修」を教職経験段階に体系的に位置づけ、このマスタープランを指針として活用し、教員の資質能力の向上を図っている。

まず、この7つの資質能力の構想図を図1に示す。

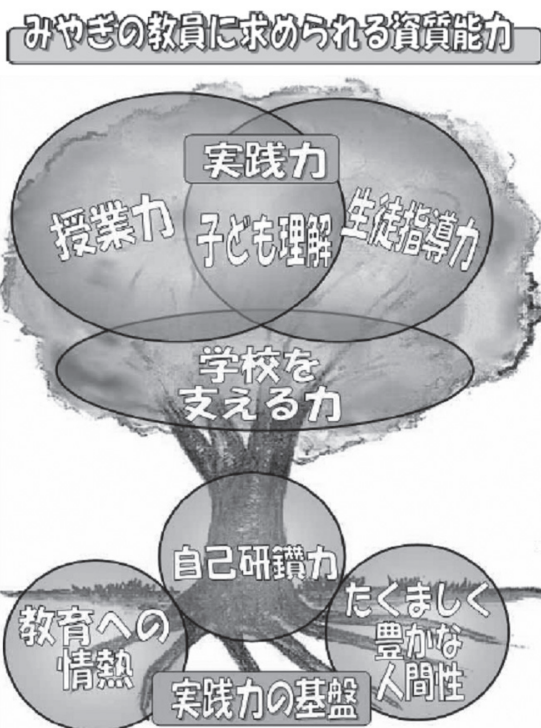


図1 みやぎの教員に求められる7つの資質能力の構想図
(宮城県教育委員会(2008)「宮城県教員研修マスタープラン」(p17)より転載)

図1のように、「実践力」として「授業力」「子ども理解」「生徒指導力」が挙げられ、これらが「学校を支える力」になっている。この「実践力」の基盤になる

のが「教育への情熱」「自己研鑽力」「たくましく豊かな人間性」の3つの資質である。これら7つが資質能力である。

また、教員のキャリアに応じた資質の向上を目指すため、教職経験段階を次の4つに分けている。第Ⅰ期(教職1～5年目)は基礎形成期、第Ⅱ期(教職6～10年目)は資質成長期、第Ⅲ期(教職11～20年目)は資質充実期、第Ⅳ期(教職21年目以上)は深化発展期である。この第Ⅰ期からⅣ期を教員のライフステージとし、それぞれの期で求められる資質能力を示したものが表7である。

第Ⅰ期では学習指導、生徒指導、学級経営、校務分掌等について一定の職務遂行能力を身に着けるとともに、学級担任としての力量を身に付ける。第Ⅱ期では学級担任、教科主任等としての経験をもとに、学習指導はもとより、学級経営・学年経営・生徒指導等の在り方に関して広い視野に立った力量を向上させる。第Ⅲ期では教員として求められる多様な経験を十分に積み、さらに校内におけるリーダー的な役割を果たす教員としてより広い全校的視野に立った指導力を充実させる。第Ⅳ期では教員としての高い専門性を発揮するとともに、学校運営上重要な役割を担い、他の教員への助言、援助など指導的役割や、学校や地域全体の教育力向上に貢献できる力量を向上させる。

教研究生は、教員歴が通算5年以上で、35歳以下であることから、教員のライフステージの第Ⅱ期に相当する。若手の教職員から中堅の教職員へと移行する時期に、本学で研修を受けていると考えることができる。

そこで、この教員のライフステージを参考にし、教研究生に身につけてほしい資質能力を示す指標を作成することにした。教員のライフステージの指標は日本の教員向けのものであるため、海外の教員にも当てはまるように修正を施した。

7つの資質能力のうち、「授業力」はそのまま、「生徒指導力」と「子ども理解」を統合して「子ども理解」とした。「学校を支える力」は「マネジメント力」とし、「教育資源の活用」を付け加えた。これらの4つを「専門職としての知識・スキル」とした。

「教育への情熱」は「使命感」、「たくましく豊かな人間性」は「コミュニケーション力」、「自己研鑽力」はそのままとし、「専門職の基盤となる態度」とした。これ以外に、教研究生は日本への理解を深めることも重

要な目標であると考え、「日本理解」の項目を作成し、その中に「言語」と「文化」を置いた。

表7には「教科等に関する専門的な知識」「児童生徒の基本的な生活習慣の指導」のように、それぞれ求められる能力が箇条書きで書かれている。この能力を教研究生向けにより具体的に示すため、「～ができる」という文に置き換え、Can-Doリストを作成した。このリストを用いることで、教研究生は「今、何ができていて、何ができていないのか」を自己評価することができる。作成した指標の試案は、本学に来る教研究生が中学から高校の教員中心であるため「宮城教育大学教員研修留学生キャリア形成支援 中等教育版(試案)」と名付けた。これを表8に示す。

表8の試案には「あなたが大切にしてきた知識・スキル・態度とは何か」を7つの資質能力から選んで記入する欄を設けた。また、すべての項目について「できる」「できない」をチェックする形式とした。このほかに「これまで追求してきたこと」、「さらに深めたいこと」、「あなたにとっての重要度(全項目から選択)」、「今年度重点的に深めたいこと(全項目から選択)」、「予定プログラム」、「時間数」、「中間アセスメント」、「達成できたこと」などを記入する欄も設け、英語版を作成した。

この試案を用いて、2016年度の教研究生3名からフィードバックを得た。試案に自己評価を記入してもらい、試案に対する意見や感想を聞いた。

L6～L8の3名はすべての項目について「できる」にチェックした。そして、3名が「このような評価表があるのはとてもよい」と回答した。このほかに、以下のような意見が得られた。

- 「できる」に評価したものの、「できる」といっても、どの程度できるかが測れるように、5段階尺度を設けたほうがよい。
- 「達成できたこと」については、自国ではできているが、日本の研修で達成できたのかと聞かれると難しいため、評価しにくい。
- 「これまで追求してきたこと」は書きにくい、「さらに深めたいこと」は書ける。
- 「あなたにとっての重要度」は選びにくいので、項目の重要度のほうが選びやすい。
- 「今年度重点的に深めたいもの」は、重要度と同じで必要ない。

- 「中間及び最後に達成できたこと」も、5段階で評価できるほうがよい。

以上のような意見が得られたので、試案をさらに検討し、修正版を作成することにした。また、英文の意図が伝わりにくい部分についても修正を施した。

6. プログラムの改善 - 2017年度の試み -

2017年度はコスタリカの教員L9のみを受け入れた。5で作成した試作版を改良した修正版を用いて、プログラム改善を試みた。

6. 1. プログラム開始前のインタビュー

4月の受け入れ前、2017年1月25日、筆者2名はL9に対するインタビューを行った。インタビューは約1時間程度で、本学でどのようなことを学びたいと考えているかを聞いた。

L9は2011年からコスタリカで教員として勤務している。主に7～11年生(日本の中学・高校に相当)に対する英語の指導を担当している。教職経験は本プログラムの申請時2016年4月1日現在で5年1か月である。L9は教員をしながら大学院でも学んでおり、修士の学位を持つ。

L9は来日直前まで、コスタリカの首都から遠く離れた自然豊かな小さな町で、生徒数25名、教員5名の高校の教員をしていた。担当教科は英語であるが、学校の教員数が少ないため、英語以外の教科も指導していた。子どもも教えることも好きで、教師の仕事に情熱をもって取り組んできた。大変優秀な教員で、これまでに校長を務めたこともある。L9が来日したのは、教師として学び続けたい、外国語である日本語を学んでみたい、英語の能力を伸ばしたい、日本の文化にも興味がある、などの理由である。

L9が本学で学びたいと思っていることは、職場で抱えている「ドロップアウト」の問題についてであった。L9が勤務する高校では、ドロップアウトする生徒が非常に多いという。そこで、日本ではドロップアウトする高校生が少ないと聞いているので、それはなぜなのか、その背景や理由を調査することで、問題の解決につなげたいと考えていた。

表7 教員のライフステージとみやぎの教員に求められる資質能力

経験段階 教職経験	第Ⅰ期 【基礎形成期】 1年目～5年目	第Ⅱ期 【資質成長期】 6年目～10年目	第Ⅲ期 【資質充実期】 11年目～20年目	第Ⅳ期 【深化発展期】 21年目以上
【ライフステージ区分】 みやぎの教員に 求められる資質能力	<ul style="list-style-type: none"> ・教員として使命感、教育的愛情を深め、広く豊かな教養や人間性を磨く 			
	<ul style="list-style-type: none"> ・学習指導・生徒指導、学級経営、校務分掌について一定の職務遂行能力を身に付けるとともに、学級担任としての力量を身に付ける 	<ul style="list-style-type: none"> ・学級担任、教科主任としての経験をもとに、学習指導はもとより、学級経営・学年経営、生徒指導等の在り方に関して広い視野に立った力量を向上させる 	<ul style="list-style-type: none"> ・教員として求められる多様な経験を十分に積み、さらに校内におけるリーダー的な役割を果たす教員として全校的視野に立った指導力を充実させる 	<ul style="list-style-type: none"> ・教員としての高い専門性を発揮するとともに、学校運営上重要な役割を担い、他の職員への助言・援助など指導的役割や、学校や地域全体の教育力向上に貢献できる力量を向上させる
	<div style="display: flex; justify-content: space-around; align-items: center;"> <div style="text-align: center;"> <p>初任者層</p> </div> <div style="text-align: center;"> <p>若手教職員</p> </div> <div style="text-align: center;"> <p>中堅教職員 主任層</p> </div> <div style="text-align: center;"> <p>ベテラン教職員 管理職層</p> </div> </div>			
① 授業力	<ul style="list-style-type: none"> ・教科等に関する専門的な知識 ・学習指導、授業づくりの力、教材解釈の力、教材化する力 ・学習指導要領のねらいを明確にした授業実践 ・教科指導・生徒指導等のための知識・技能及び態度 ・学級のコーディネーターとしての役割 		<ul style="list-style-type: none"> ・得意分野の伸長 ・不得意分野の克服 ・高い専門性 	<ul style="list-style-type: none"> ・授業力向上のための指導助言力
② 生徒指導力	<ul style="list-style-type: none"> ・児童生徒の基本的な生活習慣の指導 ・児童生徒の社会性を育むための指導 ・適切な学級経営(学級づくりの力) ・個人の理解と集団の理解 ・道徳教育と生徒指導、特別活動と生徒指導 ・児童・生徒や教育の在り方に関する適切な理解 		<ul style="list-style-type: none"> ・教育相談の技法 ・カウンセリング ・一人一人を生かす指導 	<ul style="list-style-type: none"> ・生徒指導のための校内体制づくり、組織的な取組体制 ・教員の生徒指導力向上への支援 ・地域との連携
③ 子ども理解	<ul style="list-style-type: none"> ・人間の成長・発達についての深い理解、内面的な理解 ・教育的ニーズの的確な把握 ・実態に応じた適切な指導 ・共感的コミュニケーション ・子どもからの信頼 ・教育的愛情、共感的・受容的態度で接する ・児童生徒が安心して過ごすことができる生活環境 			<ul style="list-style-type: none"> ・児童、生徒、教職員に対する関心と愛情 ・人間的な魅力・親愛感
④ 学校を支える力	<ul style="list-style-type: none"> ・学級経営 ・実践的指導力 ・学校環境、教室環境等の整備 ・校務の処理 ・教職員全体との同僚としての協力 ・学校づくりへの参画 		<ul style="list-style-type: none"> ・学校経営への参画 ・企画調整力 ・リーダーシップ ・組織や学校経営への貢献 ・教職員の育成 	<ul style="list-style-type: none"> ・学校経営力 ・リーダーシップ ・組織マネジメント能力 ・ビジョンの構築力 ・職場環境の改善 ・教職員の能力伸長 ・地域との信頼関係の構築
⑤ 教育への情熱	<ul style="list-style-type: none"> ・教育者としての高い使命感と情熱 ・子どもに対する愛情や責任感 ・職務遂行の意欲 ・教職に対する愛着、誇り、一体感 			<ul style="list-style-type: none"> ・最高責任者としての使命と責任 ・経営する力
⑥ たくましく 豊かな人間性	<ul style="list-style-type: none"> ・広く豊かな教養、常識 ・豊かな人間性や社会性 ・保護者、地域社会からの信頼 ・コミュニケーション力 ・地域や家庭と連携する力 ・自己管理能力 ・高い規範意識と責任感 		<ul style="list-style-type: none"> ・児童生徒に関する教育的愛情 	<ul style="list-style-type: none"> ・渉外力、折衝力、交渉力 ・リーガルマインド ・判断力、決断力 ・外部との協働ネットワーク ・コンプライアンスとリーダーシップ、説明責任
⑦ 自己研鑽力	<ul style="list-style-type: none"> ・自己啓発力 ・チャレンジ精神 ・各人の得意分野づくり ・個性の伸長 		<ul style="list-style-type: none"> ・自己啓発力と研修意欲 ・OJT支援 	<ul style="list-style-type: none"> ・教育や人材育成に対する明確な理念と高い識見 ・広く豊かな教養と経営能力 ・教員のキャリア形成支援

(宮城県教育委員会(2008)「宮城県教員研修マスタープラン」(p21)を転載)

表8 宮城教育大学教員研修留学生キャリア形成支援 中等教育版(試案)

	資質能力	目指す姿(例)
専門職としての 知識・スキル	授業力	教科の目標を達するための専門的知識を持って授業をすることができる
		授業を展開することができる
		教材について深く理解できる
		自ら効果的な教材を開発することができる
		学習者の主体的な学びを促すことができる
	子ども理解	人間の発達について深く理解できる
		子どもの教育的な必要を理解し、適切に提供することができる
		子どもが安心して学習できる環境を整えることができる
		子どもと保護者との信頼関係を形成することができる
	マネジメント力	個人と集団が成長できるようなクラス経営を行うことができる
		同僚と協働することができる
		担当となった校務の処理を適切に行うことができる
		学校経営においてリーダーシップを発揮し、魅力ある学校づくりに参画することができる
		若手教員などの人材育成に積極的に関わることができる
	教育資源の 活用と評価	種々の教育資源を活用し、効果的な学校カリキュラムを作ることができる
開発したカリキュラムについて評価し改善することができる		
専門職の基盤と なる態度	使命感	教育者としての使命感と情熱を抱くことができる
		規律を守ることができる
	コミュニケーション力	子ども、保護者、同僚、管理職から信頼を得ることができる
		地域住民、学校管理者等、学校のステイクホルダーと適切な意思疎通を図ることができる
	自己研鑽力	専門的知識と技術の伸長に常に励み、研修に参加することができる
		幅広い教養を有し、高めることができる
あなたが大切にしてきた知識・スキル・態度		
日本理解	言語	身近で日常的な話題について会話ができる
		自分の国や社会について簡単な発表ができる
		準備すれば、自分の国の教育や教育の問題について発表ができる
		学校で自分の国のことを紹介したり、子供たちと日本語で交流することができる
	文化	日本文化を体験しながら理解を深めることができる
		日本の学校を訪問し、学校文化について理解を深めることができる

表9 宮城教育大学教員研修留学生キャリア形成支援 中等教育版(改訂版)によるL9の自己評価

	資質能力	目指す姿(例)	自己評価	さらに深めたいこと	重要度	最終評価	
専門職としての知識・スキル	授業力	教科の目標を達するための専門的知識を持って授業をすることができる	4	指導スキルを伸ばしたい 英語力を高めたい	5	4	
		授業を展開することができる	5			5	
		教材について深く理解できる	5			5	
		自ら効果的な教材を開発することができる	2			3	
		学習者の主体的な学びを促すことができる	3			4	
	子ども理解	人間の発達について深く理解できる	3	子どもとの関係をよくしたい 教師の必要性を理解したい	5	4	
		子どもの教育的な必要を理解し、適切に提供することができる	3			4	
		子どもが安心して学習できる環境を整えることができる	4			4	
		子どもと保護者との信頼関係を形成することができる	4			4	
	マネジメント力	個人と集団が成長できるようなクラス経営を行うことができる	4	マネジメントスキルを伸ばしたい	5	5	
		同僚と協働することができる	5			5	
		担当となった校務の処理を適切に行うことができる	5			5	
		学校経営においてリーダーシップを発揮し、魅力ある学校づくりに参画することができる	4			5	
		若手教員などの人材育成に積極的に関わることができる	2			4	
	教育資源の活用と評価	種々の教育資源を活用し、効果的な学校カリキュラムを作ることができる	2	教室でテクノロジーを 使いたい	5	3	
		開発したカリキュラムについて評価し改善することができる	2			3	
	専門職の基盤となる態度	使命感	教育者としての使命感と情熱を抱くことができる	5	自分の動機づけを高めたい	5	4
			規律を守ることができる	4			4
コミュニケーション力		子ども、保護者、同僚、管理職から信頼を得ることができる	4	保護者とのコミュニケーションスキルを伸ばしたい	5	4	
		地域住民、学校管理者等、学校のステイクホルダーと適切な意思疎通を図ることができる	4			5	
自己研鑽力		専門的知識と技術の伸長に常に励み、研修に参加することができる	4	論文を書きたい	5	5	
		幅広い教養を有し、高めることができる。	3			4	

あなたが大切にしてきた知識・スキル・態度	生徒のニーズを認識し、彼らの学習に最適な環境を提供すること		
----------------------	-------------------------------	--	--

日本理解	言語	身近で日常的な話題について会話ができる	1	話す力を伸ばしたい 読む力を伸ばしたい	5	2
		自分の国や社会について簡単な発表ができる	2			3
		準備すれば、自分の国の教育や教育の問題について発表ができる	1			3
		学校で自分の国のことを紹介したり、子供たちと日本語で交流することができる	2			3
	文化	日本文化を体験しながら理解を深めることができる	3	日本の地方の違いを学びたい	5	4
		日本の学校を訪問し、学校文化について理解を深めることができる	3			4

6. 2. プログラム開始時の自己評価

次に、「宮城教育大学教員研修留学生キャリア形成支援 中等教育版(改訂版)」(表9)を用いて、L9に自己評価をしてもらった。実際に用いたのは英語版である。ここでは改訂版とその回答を日本語に翻訳したものを示す。なお、自己評価は5が最も高い。L9はいくつかの項目を5と評価しているが、さらに深めたいと考えている項目も見られた。

6. 3. インタビュー結果をもとにした指導体制

インタビューの結果をふまえ、特別講義の担当者にL9の希望に合った内容を提供してもらえるように依頼した。依頼の内容は表10のとおりである。

表10 依頼内容

来年度は教員研修留学生1名のみですが、新プログラムを試行し、プログラムの評価を随時行いながら、さらに改善していく予定です。

具体的な内容としては、日本事情(日本の文化、日本の社会、日本の自然)、日本語、指導教員からの専門指導はこれまで通り盛り込みます。また、教員研修留学生のニーズに合わせて、貴講義の先生方に、講座としてではなく、教員ごとに授業をお願いする予定です。

来年度の研修生は、L9(コスタリカ)です。学生数約25名、教員5名の小さな高校の英語教員で、英語以外の科目も指導しています。また、校長の経験もあります。L9が現在興味を持っているテーマは、「高校生のドロップアウトをどのように防ぐか」です。L9は日本でドロップアウトをする高校生が少ないのはなぜか、その背景や理由を調査し、コスタリカの学校にも応用できないかと考えているようです。こうしたテーマあるいは関連する分野について、ご指導いただける先生のご推薦をどうぞよろしくお願いいたします。

6. 4. プログラム修了時のインタビュー

約1年の研修の終わり、2017年12月19日に、L9が自身の学びをどのように捉えているかについてインタビューを実施した。

L9は専門教育として、指導教員の講義や指導のほか、英語教育の講義を中心に受講した。コスタリカの英語教育のカリキュラムは、コミュニケーションアプローチである。しかし、実際にはテキストを用いて、文法を中心とした指導をするだけであった。講義を通じて、タスクベースの教育方法を学ぶことができた。特に、学習者を中心とする指導の重要性や、学習者に何が必要なかを考えて指導することの大切さを学ん

だ。また、日本語の学習をすることで、言いたいことが言えないというもどかしさを感じるなど、英語を学んでいる生徒の気持ちが理解できるようになったという。

また、指導教員と共同研究を行い、学会発表や論文執筆をする機会が持てたことにも満足していた。

このほか、L9は2つのボランティア活動に参加した。1つは宮城県のM高校の「イングリッシュ・カフェ」というクラブ活動のボランティアである。L9は週1回、1時間、高校生と英語で話すという活動に参加した。2つ目は本学の英語教員が主導する学外プロジェクトのボランティアである。東日本大震災と原発事故によって、福島の内陸部に避難している大熊町の小学生に対する英語学習のサポートを行った。L9は日本人学生とともに、子どもたちに母国コスタリカについて英語で紹介するなどの活動を行った。

以上のような学びを踏まえ、L9に1年間の自身の学びを振り返ってもらった。L9はプログラム開始前に、高校生のドロップアウトをどう防ぐかに興味があった。しかし、本学での英語教育の学習を経て、学習者のモチベーションが学習上、最も重要であることに気づいた。そして、学習者のモチベーションを高めるために必要な指導を教師は考えなければならないと考えるようになった。

つまり、L9は学習者である高校生が何を望んでいるのか、高校生の立場になって考えることで、高校生のモチベーションを高める指導につながるのと考えに至った。L9が勤務する高校のドロップアウトの問題についても、生徒のモチベーションの低さに原因があったのだらうと分析した。

以上から、L9は課題について考えて分析し、それを解決する方向性を見出すことができたと言えるのではないだろうか。

プログラム全体については、日本の文化、社会、自然、教育のすべてをよかったとし、特に、博物館やハイキング、学校見学など、体験や活動を通して学ぶスタイルがよかったと述べている。また、プログラムには満足しているが、時間数が少なすぎると答えた。前期は授業が少ないため、学習ペースがつかめず、時間を持て余すこともあった。第3期には授業数が7に増え、忙しくなったが、その分充実した学びになったという。少なくとも1日に2つ以上の授業があればよい

のではないかと述べている。

また、特別講義では教員と1対1であった。しかし、それ以外の授業やボランティアに参加したことによって、日本人の知り合いや友人ができ、彼らとの挨拶や会話を通じて、日本語を話す機会も増え、大学に自分の居場所があると実感できるようになったと述べている。

6. 5. プログラム修了時の自己評価

プログラム実施前にL9が「さらに深めたいこと」に記載したことが達成されたかどうかをみていく。最終評価は表9の網掛け部分である。

「専門職としての知識・スキル」の部分を見ていく。「授業力」では「指導スキルを伸ばしたい」と「英語力を高めたい」が達成でき、評価がやや高くなった。「子ども理解」では「子どもとの関係をよくしたい」と「教師の必要性を理解したい」の両者ともに評価が高くなった。「マネジメント力」も評価が高くなった。「教育資源の活用と評価」では「教室でテクノロジーを使いたい」としており、指導教員が行っているICTを用いた英語の授業への参加や、高校でのICTによる授業見学などを通して、理解を深めることができたとして、評価も高くなった。

「専門職の基盤となる態度」については、「使命感」で「自分の動機づけを高めたい」としていたが、こちらの評価には変化が見られなかった。「コミュニケーション力」では「保護者とのコミュニケーションスキルを伸ばしたい」としていたが、本プログラムでは保護者との接し方などを学ぶ機会がなかったため、評価には変化が見られなかった。「自己研鑽力」では「論文を書きたい」としており、指導教員と学会発表や論文執筆を行ったことで、評価が高くなった。

「日本理解」では、「日本語」の「話す・読む力を伸ばしたい」としていたが、両者ともに評価が高くなった。「文化」については「日本の地方の違いを学びたい」としており、国内旅行に出かける機会が多かったことから、理解が深まったようである。

6. 6. L9によるプログラムの評価

L9から、本プログラムの評価を得た(表11)。

表11 L9によるプログラムの評価

プログラム全体	3
日本語	3
日本の文化	4
日本の自然	4
日本の社会	4
日本の教育	4
専門の学習	3
指導教員の指導	4
学校訪問	4
自国の文化・発表	4
文化体験(旅行など)	4
平均値	3.73

表11より、L9の評価の平均は3.73で満足度が高かった。本プログラムに対する意見や感想、学んだこと、帰国後に活かしたいこと、改善へのアドバイスを以下の表12に示す。

表12 L9によるプログラムへの意見や感想など

意見や感想	このプログラムの担当者はみんなすばらしく親切で、とても助けてくれた。ここでの学習はすばしかった。私が取った講義は内容もよく、多くのことが学べた。日本語の授業をもっと受けたかった。
学んだこと	日本語や日本の文化、日本人について学んだ。指導技術、生徒の参加や学習プロセスを改善するための方法、モチベーションとは何で、それが学習プロセスにおいて重要であることを学んだ。
帰国後の活用	このプログラムで得た知識を活用したい。ここで行った研究成果をコスタリカで論文として発表し、ここで学んだことをコスタリカに広めていきたい。
改善へのアドバイス	講義数をもっと増やしてほしい。空いている時間が多いので、他の講義や日本語の講義をもっとあればよかった。

表12から、L9は本プログラムで指導技術やモチベーションなどについて多くのことを学び、研究の成果を帰国後に発表しようと考えていることが分かる。プログラムの改善には、授業時間数の増加が必要だと指摘されている。

7. プログラムの改善 - 2018年度と2019年度の試み -

2018年度及び2019年度には、2017年度に実施したプログラム開始前・終了後のインタビューと自己評価を継続して行った。自己評価には、改訂版に毎年少しずつ修正を加えたものを用いた。また、プログラムの前後だけではなく、第2期の終了時(7月)に、中間インタビューと自己評価も実施した。

2018年度は、課題(2)の「教研究生を人的リソースとして活用するためには情報提供が不十分である」に対し、プログラム前に実施したインタビューの内容をもとに、教研究生の仕事や研究テーマ、本学で学びたいことについて、一人ずつプロフィールを作成し、学内のすべての教員に情報提供をメールで行った(図2)。

〇〇 ××さん	
情報	シノブエ、男性 中等の体育教員 教員歴 8年(2009年~) 指導教員: 〇〇 准教授 (体育教育講座)
研究テーマ	ゴムバンドが若いアスリートの身体能力にもたらす効果 ジムがないため、ゴムバンドを使って学生たちの筋力トレーニングをしている。筋力を高める方法や有効性について知りたい。
本学で学びたいこと	<ul style="list-style-type: none"> ・体操、剣道・柔道・空手などの格闘技系のスポーツなどの指導方法 ・体育の授業見学 ・子どもの発達 ・部活の指導・見学 ⇒実際に見てみたい ・教師と子どもの動機付けを高める方法 ・研究テーマ ⇒日本でいっゆる「体力づくり」に相当する部分か? こうした教授や観察があるといのでは?(業間に行われる活動など?) ・日本語・日本文化

図2 教研究生のプロフィール

また、課題の(3)「担当者間の定期的な情報交換の場がない」に対しては、中間のインタビュー及び自己評価の結果を指導教員に提供することにした。各教研究生が望む学習内容や学校訪問などを伝えることによって、第3期の専門学習をさらに充実させることができるのではないかと考えた。このことによって、課題の(5)「学校訪問や授業見学の機会が不十分である」という教研究生の不満にも応えることにつながるのではないだろうか。

8. これまでの取り組みの成果と課題

これまで述べてきたように、2015年度から2019年度にかけて、教研究生プログラムを現職教員研修という観点から見直し、改善するために、様々な取り組みを行ってきた。ここでは、先に挙げた5つ課題について、取り組みを振り返る。

まず、課題(1)プログラム内容に改善が必要という点について検討する。プログラムの内容を大きく変えることはできなかったが、プログラムの開始前・中間・終了の3つの時期に、教研究生へのインタビューと自己評価を実施した。これにより、教研究生が自らの課題は何か、プログラムを通じて、どのようなことを学んだのか、課題の解決ができたかなど、各自の学びを振り返る機会を提供することができるようになった。これは、自ら課題を見つけ、主体的に学び、課題を解決していこうとする姿勢、すなわち、「学び続ける教師」として重要なプロセスである。このような機会が提供できたことは、「現職教員研修」という観点から本プログラムを見直し、改善を行ってきたことの大きな成果であると言えるのではないだろうか。

課題(2)教研究生を人的リソースとして活用するための情報提供が不十分である、課題(3)担当者間の定期的な情報交換の場がない、の2つの課題を検討する。教研究生へのインタビューをもとにプロフィールを作成したほか、様々な情報を提供することによって、これらの課題を少しではあるが改善することができた。

課題(4)教育に関連する講義数が不十分であるについては、特別講義のコマ数を増やすことができず、改善には至っていない。しかしながら、教研究生の学びたい内容を提供してもらえるように協力を呼びかけたことで、講義担当者以外の教員から協力を得ることができるようになった。とはいえ、解決できたとは言えず、継続課題としていきたい。

課題(5)学校訪問や授業見学の機会が不十分であるについては、プログラム開始前・中間の時点で得られた教研究生のニーズを、指導教員と特別講義の担当者に伝えることによって、内容を改善することにつながることができた。また、附属学校への協力要請により、授業見学も可能となった。しかし、長期間にわたって授業を見学したいというニーズには十分に応えることはできていない。こちらも今後の課題としたい。

9. おわりに

本稿では、本プログラムの5つ課題を解決するために、現職教員研修の観点からプログラムを見直し、改善に向けて行ってきた様々な取り組みについて述べた。

これまで、留学生部会ではプログラムを提示し、講義を担当者に任せるだけで、プログラムを検証する機会は設けていなかった。しかし、プログラムを総括するコーディネーターを置き、開始前・中間・終了時の3回、教研生に対するインタビューを行い、ニーズや学習目標などを聞き取り、それらを教員に提供することにした。つまり、コーディネーターが中心となり、教研生の指導に関わる指導教員や講義担当教員、その他の教員にも働きかけることで、教研生一人一人の学びを「ユニットの形」で支援することができるようになったと言える。

また、コーディネーターの呼びかけにより、学部の授業に教研生をゲストとして招くことも行われるようになってきている。教研生に母国の教育や自らの教職キャリアについて話してもらうことにより、学部生は当該国の教育ならびに教員養成について学び、あわせて、日本の教育を相対化し、長所と課題についてより深く考える機会を得ている。こうした機会の提供が多数の授業で行われるようになった。自国の教育や教職キャリアパスについて真摯に考え留学している教研生ならではの情報や視点が学部生にもたらされている。教研生は、第三期中期目標・計画が示す、グローバルな視点をもつ教員の育成において、重要な人的リソースとなっていると言えるだろう。

今後の課題は、プログラムのコーディネーターが中心となって、これまでの取り組みを続けていくことはもちろんであるが、さらに充実したプログラムにするため、教育に関する講義の提供や長期にわたる授業見学の機会を増やしていくことである。

参考文献

- 阿部美菜子・植木節子(2015)「教員研修留学生の教育専門用語習得に関する一考察」『千葉大学教育学部研究紀要』63,137-146.
- 和泉元千春(2019)「教員研修留学生と国内学生の協働を取り入れた言語学習の実践－教員研修留学生プログラムにお

- る中学校交流の準備を例として－」『次世代教員養成センター研究紀要』5,151-156.
- 稲葉みどり(2015)「教員研修留学生の小学校訪問の教育的効果の考察」『留学生交流・指導研究』18, 85-99.
- 坂本恵(2015)「2014年度教員研修留学生プログラム改編の取り組み」『東京外国語大学留学生日本語教育センター論集』41, 217-227.
- 菅長理恵(2012)「教員研修留学生プログラム改編の取り組み」『東京外国語大学留学生日本語教育センター論集』38,167-181.
- 高木展郎・白井達夫・三浦修(2017)『新学習指導要領がめざす これからの学校・これからの授業』小学館
- 高橋重紀子(2018)「教員研修生プログラム改善の取り組み」第33回国立大学日本語教育研究協議会 第2部分科会テーマ2「教員研修留学生と日本語教育」配付資料
- 中山亜紀子・難波康治(2003)「教員研修留学生の受け入れ体制に関する調査報告」『大阪大学留学生センター研究論集 多文化社会と留学生交流』7,77-88.
- 永井智香子(2003)「教員研修留学生の留学効果について－帰国後のインタビューを中心に－」『長崎大学留学生センター紀要』11,91-103.
- 難波康治・新矢麻紀子・中山亜紀子・浜田麻里・林洋子・三登由利子(2001)「教員研修留学生に対する追跡調査報告」『大阪大学留学生センター研究論集 多文化社会と留学生交流』5,161-176.
- 野呂幾久子・畑俊明・上田功(1997)「教員研修留学生の受け入れと教育：日本語能力の問題を中心に」『静岡大学教育実践研究指導センター紀要』4, 1-9.
- 橋本健夫・尹仁子(1995)「教員研修留学生の研修内容と方法の改善に関する研究」『長崎大学教育学部教科教育学研究報告』24,77-92.
- 本園愛実(2018)「深い学びのための教職大学院カリキュラム・マネジメント」日本学校教育学会『学校教育研究』33,134-140.
- 宮城県教育委員会(2008)「宮城県教員研修マスタープラン」
<http://www.edu-c.pref.miyagi.jp/guidance/plan/>
(2019年9月15日閲覧)
- 宮城県教育委員会(2018)「みやぎの教員に求められる資質能力」
<https://www.pref.miyagi.jp/soshiki/ky-teacher/shihyo.html>
(2019年9月15日閲覧)
- 文部科学省(2019)「教員研修留学生各大学コースガイド」
http://www.mext.go.jp/a_menu/koutou/ryugaku/1411370.htm
(2019年9月17日閲覧)
- 文部科学省(2018)「文部科学省高等教育局学生・留学生課資料」『文化庁日本語教育推進会議第9回(平成30年9月19日)配付資料4-1』
http://www.bunka.go.jp/seisaku/bunkashingikai/kondankaito/nihongo_suishin/09/1409907.html
(2019年9月15日閲覧)

(令和元年9月27日受理)

